リステラス星圏史略
古資料ファイル
５－Ｘ－Ｚ
『俺と好』
（没原稿）
（本編）

（発掘作業中）

霧樹里守 is 土岐真扉
as
遠野真谷人

（没原稿・第一部）

（没原稿・第二部）

「オレもいますこしは歩き続けた方がいいと思う。体力的な問題はさておいて、こんな気の滅入る場所で一旦腰を落ちつけちまったら、後ろの３人にもう１回歩きだす気力が残るかどうか解らないだろう？」

　…ああ。そうか。なるほど。

　最初っからそう云やいいんだよ好のアホ！

「まだ大丈夫だな、ゆかり」

「ええ正行さん、あたくしはね。でも後ろの方たちは全員１年生でしょう。」

「ああったくいつまで続く気なんだこの坂はっ」

「…でもありませんわ。先程より心持ち明るくなって来たように思いません？」

　と、その時。

「　ＸＸＸＸ‼　」

　鋭い誰何（すいか）の声…だろう…がとんで、俺たちはサーチライトの真っただなかに居た。

「　ＸＸＸＸ！　△△，ＯＯＯＯＯＯ？！」

　……あん？

　えっらい早口でワケのわからんなまりかたしてるけど、よくよく聞けば、これ、英語じゃないか…。

　見事な KING’S ENGLISH で会田先輩が二言、三言。

　と、また、

「　ＸＸ!?　△△△　…!!　」

〜〜〜〜っっ

どっこの方言だよこの英語。まるでヒアリングでけん。

疑問形の感ど一詞。らしいとは思うけど…

何だって俺たちゃ地球人（アースメン）だっつって驚かれにゃならんの。

大体エーゴが通じるなんザ、ここドコよ。

「　てめーらなァ。　ＸＸＸＸＸＸＸＸッ！」

世にも兇悪な顔して前髪かきやり。

おっそろしい早口で好がまくしたてはじめたのが、なんとスラング。

『　FUCK　YOU !!　』だけかろうじて聞きとれる。

ゆかり姫のぎょっとした顔!!

あーあー、ニューヨーク育ちはこれだからっ

ところがこっちのが、よく通じたんだよね…。

相手方の言葉が心持ちゆっくり、わかりやすくなった。

誰だ、どこから入って来た、てのが、さっきから繰り返されている、質問の要旨。

『　てめえから名乗んのが礼儀ってもんだろう　』

いつもながら素直でない杉谷好一クン。あーあ、また話ややっこしくする気かよ…。

『　まずライトを消してもらえないか…　ここが何処なのか教えて頂きたい。』

…ら？　先輩までヘソ曲げていらっしゃるようで…

　おい、とか何とか光源のむこうで声がして、サーチライトが消え、かわりに周囲全体が明るくなる。

　さっきの、例の "部屋" と同じ位の広さ、同じくらいの天井。柱。

　ただここは建物（なり、なんなり）のエントランス（入口）部分に当たっているらしい。

　俺たちから向かって左手の方角に、一面のガラス張り。

　自動ドアの一種だろう。

『　もう一度尋く。　どこから入って来た？　』

『　教えられるもんなら教えてやりたいんだがね。』

　あ、それは云えている。だけど。

　その場の指揮官らしいまだ若い男…２０代後半ぐらい。確かに地球人だ…は、さっと手のひと振りで１０数人からいる部下に武器を構えさせて散開させ、俺たちを取り囲んでしまったのだ。

『　衛士の交代時間と知って忍び込んだのか　』

『　そいつぁ初耳だな　』

『　どこの手の者だ。目的は。』

『　知らねェ。』

　ふてぶてしく開き直った…実際ウソはついてないのだが…応答に、相手方、だんだん険悪な表情。

　今にも『捕えろ。』という一語が発せられようとし、それに構えて好がズイと半歩進めかけた時、

『　やめろ。杉谷　』

　会田先輩の落ちついた手が、ヤツ（好）の肩をひきとめる。

『　連れの失礼は許してほしい。別に悪気があってのことではないんだ。

　わたし達は地球（アース）から来た。ここへは故意に潜入したわけではないし、はっきり言ってここが何処なのかも解らない状態だ。

　さしつかえなければ教えてほしい…つまり、ここが、その…

　何という星か、という事だが。　』

　捕り手たちのなかにザワッとした反応が走るのを、その時の俺はたいして気にとめもしなかった。

　なんとなれば感動してしまっていたのだ。

　会田先輩、本当にこれで俺たちと１歳しか違わないんだろうか、これで。

　この堂々たる落ちつきぶり。腹の据わったしゃべりかた。

　まだ "青年" の粋に達したばかりの年齢とは云え、身にそなわった貫禄から氏素性の正しさはおのずと知れるんだろーね。

　さっ、と、若い男の態度に変化が出る。

　なんというか…　緊張。

　敵にしろ味方にしろ、こいつは大物だろう、という。

『　……　ここが MOON だという事を知らないとでも？　』

「　…　ムーン　…！？　」

「お月さま ?! 」

　俺たち、異口同音に。

「やはりな。」　と会田先輩。

　好、不気味な薄ら笑いして頷き、ゆかり姫は神妙な顔。

　残り４人はただ呆然…　もちろん俺も含めて、の話。

「もろ、ルナティック。（気のふれた）」

　"くっちゃん" こと楠木女史、それでもおちょくり精神（？）だけは忘れない。

　見上げた根性じゃ…

『　地表（アース）から…　故意に来たわけでも、場所が判っているわけでも、ないと言ったな。…　いいだろう。とりあえず事情を話してもらおうか。』

　…話せ。たって。説明。…ねえ…？？

　俺たちは皆一様に顔を見合わせてしまった。

　自分たちだって信じられないような話を、どうやって他人に解らせればいーんだろーか。

『　…え～、えと、つまり、俺たち登校中だったんだけど…　』

　好は他人に【説明】なんて親切なマネ死んだってしない奴だし、会田先輩のゆったりした King’s English は、どーも相手側にはスピードのトロい古語めいたものに聞こえているようだし、…ってことは、ゆかり姫も同様。

　好と一緒のニューヨーカー・ユミちゃんは、再びベソかきのまり子嬢（いー加減にしてくれよ、もう）の面倒み中。

　結果として、ブロークン混じりの俺の Japaniese English にオハチが回って来てしまった…。

『　信じられない。』

『　事実ですよ。』

『　まさか。』

『　本当の話です。』

　案の定、警備隊だか衛士だかの隊長サンは てん から話をうけつけない様子だったけれど、とりあえず俺たちに害意はなさそうだと判断してくれたのか、最初から尋問は彼の任務のうちではなかったのか、どこか他の機関へ「引き渡し」という事で、この件は処理されてしまうようだった。

　引き渡し…警察かなにかへ７人ゾロゾロ連行されて行くのである。

「杉谷。大人しくしていろよ。」

　銃をつきつけられてエア・カー（と覚しきもの）に乗りこまされようという時に会田先輩がささやいた。

　好、なにも答えず、それでも不承不承「スキをついて脱出」というテをあきらめている。

　…こいつに一言で命令きかせられる人間って、先輩以外、まずいないだろーな…。

　しかし。

　イモ虫めいた型の囚人護送車から解放され、別の建物の内部に連れて来られてみると、俺たちをしょっぴいた係官に言わせてみれば今は "夜" なんだそうで、人影まばら。

　月って、自転してないんだよね。

　どうやって１日区切ってるんだろう、地球との公転関係もあるだろうに。

　市街地の上に広がる天蓋（ドーム）の外は、

（参照したければ資料）

http://85358.diarynote.jp/201612152140446314/

『　ここが MOON だという事を知らないとでも？　』　（※『俺と好』没原稿・本編・第２部）。

2016年12月15日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

（没原稿・第三部）

（　とにかく人間は生きていた。　）

　縄で荷物を吊り上げる奴。それをチョン切って途中からかすめ盗る奴。

　これだけくたびれた街の中で、水や電気なんてものは何処から供給されて来るんだろう。

　とにかく人間は生きていた。

　『地面』に着く。石畳の、ところどころにどでかい水たまりのある、かすかに潮の香りのまじる狭い通り。

　急に進路が平面になるので、ちょっとばかり、めまい。

　……キィッ。

　軽い異質音を遺してヤニさんのクォクが停止した。

　ひらひら操縦盤の上を白い指が躍って、圧縮空気の噴出が停まり、四輪が地面に降りてくる。

「お、なんでさ。こんだけ悪路ならホバーで走ったほうがずっといいじゃん。」

　栗原が不平そうに口をとがらす。

「バァカ、おまえ、ンな狭い所でやってみろ。風圧が壁ではねかえされて乱気流になっちまわァ。」

　頭バサバサかきやりながら、ひろと先輩。

　走ってる間に風で髪なでつけられちまったのが、かえって気持ち悪いらしい。

「そうなンですョ。別にマ、だからってそれほど走りにくくなるってェわけでもありゃしませんけどネ。ここらの住人は気が荒いから、うっかり干し物ふっ飛ばしたりすると、おあとがうるさくってねェ。」

　で、みんな黙ってヤニさんにならう。

　こみいった路地をくねくね折れ曲がり、もういい加減ひき反せと云われても道が解らなくなってきた頃。

　前方でハデな爆発音がして、薄暗い灰色の道の右手に見える鮮やかな炎。

　次いでその出火した窓のすぐ下の扉、と一緒に男、が、まるで蹴りつけられたように吹っ飛び出して、俺たちの進路の上にドサッと落ちた。

「おわッ！」

　後ろの方にいた俺やユミちゃん、ゆかり姫なんかは咄嗟にブレーキを踏む。

　ひろと先輩に栗原、左右にハンドル（操縦桿）切って。

　だけど先頭２名、とても間に合わない。

　！　轢く……!!

　俺は目をつぶった。

　ひときわ高い轟音と、バキッと何かの割れる乾いた音がして。

　そして低い地響き。

　重いものが軽々と着地した音。

「おぉっと。危ない危ない。」

　あっけらかんとしたヤニさんの声がする。

　目を開けてみると、そこには…

　血しぶきも散乱した肉片も何もなかった。

　ただ古びた木製のドアが真っぷたつに割れて路上の男の両側にあり、その向こうに火明かりを浴びて…

　２台のクォク。

「　、さぁっすがっ！　お兄ィちゃんっ♪」

　思わず叫んでいる声。

「　すげー。」

　飛びこんだゴミ箱の山の中で後進をかけながら栗原。

　コケかけた機体を引き起こすひろと先輩。

　どうやら、頭上を跳び越えたらしいんですね、クォクで。

「　なかなかの腕じゃないですか、え？　若旦那。」

　だけどモトクロスの腕前にのんびり感嘆している暇はなかった。

　時ならぬ爆音とアクロバットに、小路を見降ろす窓という窓から、どこにこれだけと思うぐらいの顔が突き出される。

　" じいさん！　気触れのじいさん、一体なしたんだねっ "

　英語を話してる大柄な女や、他にもてんでな言葉でしゃべってる連中が、どどっとあちこちから走り出してくる。

　と、見覚えのある白熱光が空を切った。

　月面で、あの好を負かせた、楠木女史の足元に穴をうがった、光線。

　短い悲鳴をあげて人が倒れる。

　動かない。

　もう一閃。

崩折れる長い金髪。

逃げようとして、炭化した傷口が開く。

赤い。

流れだすもの。

あれは、血液？

…全ては一瞬の事だった。

「動くんじゃねえ！」

ひび割れた日本語が耳を打つ。

火炎の下で無気味なシルエットを浮きたたせながら、その男たちは銃を構えていた。

テラテラと火明かりを反射させる、不安な緑色の軍服。

どこかで見た気味の悪い緑。

そう、あれは誰かの、スーツ（背広）の色だ…

「　動くなって云ってるんだよっ。」

隊長らしき男が再度わめく。

凍りついた光景。

火炎と燃える音だけが人間を無視して続いていた。

「　、う…　」

蹴り出され路上に転がっていた男…老人…が、低いうめき声とともに意識を回復したようだった。

「　じい！　」

白い服の女が軍服を突きのけて走り出そうとする。

逆に殴り倒される。

赤ン坊の泣き声。

彼女の手から落ちて…

男たちの手に、さらわれた。

「　かえして!!　」

悲痛な叫び声。

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612211831329988/
（　とにかく人間は生きていた。　）　（※　『俺と好』　没原稿救済こおなあ。）
2016年12月21日 リステラス星圏史略　（創作）

（　名のみの『地球統一』政府は実はその　）

　何の為に…つったって…何も欲しくて。

「　う。ごめん。」

　もう不機嫌の好には謝るっきゃない。

　…に、しても、ひろと先輩もいる所でンな話する事ないじゃんかよっ！

　そりゃ、これくらいの会話で意味通じる筈はないと思うけど、それにしてもやっぱり…

　う〜〜〜。

　俺たちの話が聴こえたのかどうか、先輩は先に立ってほてほて歩いて行った。

　鈍い俺でも好と情報屋の含みと暗喩ばっかで成り立ってるような遣りとり聴いてるうちにおぼろげな所は呑みこめてくる。

　これでも国語の成績はいーんだいっ！

　…早い話が、宇宙港着いた頃に無邪気に喜んでた『地球の統一』なんて話はハナから存在しなかったのだった。

　名のみの『地球統一』政府は実はその首都・スターエア島しか領有していない。

　その他の地域がどうなっているのかまではよく解らないけど、とにかく、この島。

　何で南太平洋のちっぽけな島が『地球』代表なんて話になっているのかははっきりしない。ただ、アルテミス姫の父上が宗主だとかいう "コロニスツ" （宇宙植民者連合）が、各コロニーの地球上の母国からの経済的独立を宣言・実行して以来、この国は対宇宙商取引の唯一の地球側窓口としての役割を果たしている。

地表と宇宙空間…つまり大気圏の離脱・突入の正式航路は、事実上、Pont.P＝スターエア宇宙空港に限られているのだ。

ん〜〜〜。

長崎の出島か、雰囲気から云うと上海、香港。

一時期の中国の外国租界地にとても似ているような…。

で、こんな風な街にはとてつもない大金持ちと、貧民、そして無法者…アウトロウ…達が集まる。

地球と宇宙の全輸出入を扱うとなりゃ、上手く立ち回れる人間の懐ろにころがりこむ金額は、それこそ気の遠くなるようなものになる。

その富で築かれたのが頭上はるかな未来楼閣群。

そこからはみ出した下層労働者階級が、電気も停まりかけたような地上十数階の前世紀の遺物・コンクリートジャングルで暮らして、それさえ許されない浮浪民たちは海面すれすれの天然洞窟か、迷路のような下水処理施設の中。

もろに財産の差で上中下と人間が分断されている。

アウトロウたちはそんな世界で地表をはさんだ上下数階分を占拠しているのだった。

それも島の南半部全域を覆って広がっているのだから、無法地帯はかなりの規模になる。

ケチな盗みや恐喝・脅迫の請負といった「汚い仕事」に手を出した程度で１人前の顔してのし歩く下層労働者のチンピラども。贅沢好きの女たちにあきて紅燈に足を踏み入れるお忍びの高級官僚。群がる水商売の女たち。

１晩安い売春婦や酒場の下働きはおおかたが喰いつめた浮浪民の息子や娘たちだ。

そして…

他の階層から通って来る者の他に、無法地帯には無法地帯だけの住人も多勢いるのだった。

運び屋。殺し屋。傭兵に戦争仕掛け人。

彼らのいずれもが賞金首の犯罪者か、それともあまりにもうえのほう（上層部）と密接なつながりがあるが故に、どんな官憲の手も及ばないか。

それに命がけの危険なカケヒキをなりわいとする情報屋も忘れるわけにはいかない。

彼らが頼るのは自分の頭と２本の腕。彼らが恐れなければならないものは何もない…

そういう極めつけの奴らばかりが格好の溜まり場にしているのが、もとは同じ穴のムジナのジャック・ゴールド（Ｊ・Ｇ）の、つまりは俺たちが今いる店だった。

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612211912028194/
（　名のみの『地球統一』政府は実はその　）　（※　『俺と好』　ぼつげん 救済こおなあ。）
2016年12月21日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

（案の定、日本は再軍国化の一途をたどっちまったと見える。）

　問題は、今日という日に限って物知らずにも迷い込んで来た、あの酔っぱらいの愚連隊のアホウどもだ。

　解りやすくする為にも１回社会状勢の説明に戻るね。

　日本という国は、形を変え政治制度を変え、しつこくたくましくまだ生き残っている。

　で、皇国軍 …なるものが存在し。

　俺たちの時代の後しばらくして、案の定、日本は再軍国化の一途をたどっちまったと見える。

　ま、ね。

　歴史をやってりゃ世の中がどうしてもそっちの方へ流れてしまうものだくらい、解り切ったことではあるけれど…

　途中どういう経路を通ったかは知らないよ。

　とにかくある時点で、絶対君主制というか独裁制が成立し、日本に象徴天皇ならぬ実権を握った皇帝が生まれてしまった。

　で、そいつか、そいつの何代目かが、『環太平洋皇国』というものを造り始める。

　あっちこっちの強大国はあせりますわな、当然。

　末世のこととて地上の採掘可能な鉱物資源なんて底をつきかけてるし、太平洋っつったら地球上で１番広い海だぜっ！

　それで何だかんだ、すったもんだの挙げ句にズルズルと局地戦が拡大し。

　ある日ある時、気がついたら、世界中がドンパチやっていた。

　…第３次世界大戦。

こあいぜこれはっっっ

幸い各国の協定があったかなんかして最終戦争化だけは免れたらしい。

人類はまだ生きのびているけど、数十年に及んだズンベラダラリの戦いのおかげで地球上の居住可能区域はかなり減少した…そうだ。

やがて『母なる大地』を勝手に破壊されてたまるかという理由からコロニスト連合成立。

戦争に必要な未加工資源の輸入が大幅に制限されて、どの集団も息を切らし、何時とはなしのうちに始まってしまった世界大戦は、また何時とはなしにうやむやのまま終結した。

その頃には、戦争を開始した旧大国のうちでもその形を保てているものは殆ど無いといってよかった。

国力の疲弊と民衆の貧困。

戦争反対者によるデモ。

革命。

レジスタンス。

独立戦争。

ひどい所では国家そのものが瓦解し、無政府状態にまでなった。

ところが日本。

いや環太平洋皇国軍。

しっかり勝ちのこって、しかも当初の目的以上の地域を手中に納めてしまっている。

で、最近、強大な軍事力を背景として比較的平和的にスターエア・地球統一連邦政府と同盟を結び。

早い話が軍事的援助と名打って乗り込んで来た駐留軍の司令官が、どーゆーわけだかスターエ

アの政治方面にまで指揮権を持っちまったって事だった。

　そして話は俺たちの喧嘩に戻る。

　ぶん殴られた１行のボス、御丁寧に好に両肩をぶち抜かれたバカ。

　こいつが現司令官の弟だったのだ。

　デキの悪い、だけどその分、兄からは可愛がられている…っっ

　…これでよーやっと好の「こんな真似はしないんだろうがな。」の意味がわかった。

「　それで？　どうなさるおつもりですの杉谷さん。」

　ひと通り解った限りを話し終えると、少し冷たいような声でゆかり姫が云った。

「　逃げるさ。」

　ごくあっさり答える。腕組んで。壁によりかかって。

「　どおやって？　」

　むしろ余裕たっぷりお手並み拝見、さあどうぞ好きにやっておくんなさい…とばかりにヤニさんが頬笑んだ。

　…ぅぅ。色っぽいっ！

　…

「　ここだ。これが今いる場所。都市の地上第一層。無法地帯と労務者居住区の境界にあたる。」

　そんなものをいつの間に仕入れて来たのか…酒場にいる時は俺はほとんど好のそばを離れなかたったのに…懐から折り畳んだ地図をさらに幾葉か取り出して、好が云った。

「酒場は地下２層から３層までがぶち抜きになってる。正面入り口は地下第３層。同じような店の並んでるメイン・ストリートの…ここ、東端に近い。

　ここから出て地上第２３７層の軍司令部にたどりつくまでが４０分。

　事情を説明して１０分。

　司令官が命令を下してオレたちを逮捕させるべく手を打ち始め、バラバラな指揮系統をくぐり抜けて、末端が実際に動き出すまでに更に２０分。

　つまり…（ここでちらりと時計をのぞきこんで）…そろそろ全市に渡って非常線が敷かれる頃だ。」

「　あ〜あ。」

　と俺はタメ息。

「お。んじゃモタモタする間に逃げ出しときゃ良かったんじゃんかよ。」

　栗原が不思議そうな顔をする。

「ふん。」

　気に喰わなそうに肩をすくめた。好が、理由

（欄外に「なんや何をせつめーしておるのか、ようわからんくなってきおったなっっ」とゆーセルフつっこみだか守護霊サン？の自動書記ツッコミだかわからないものが書いてある…）

…シツコク言及しますが、コレ、書いてたの、１９８３年。とかですから…★

…ＴＰＰ…って、正式名称、『環太平洋』ナンチャラ。でしたっけ…？？？

…ｗ（ーー；）ｗ…

「クォクで走れるルート（道路）で宙港へ抜けるやつてェと、これだけだ。もろ、軍司令部の正面を通る。

　オレたちが乗って来たのは地球のＧにも耐えられるよう、その他にもいろいろ改造がほどこしてあるが、もともとクォクってな宇宙空間での作業用に造られてる乗りモンだからな。地表に降りて来りゃかなり目立つ。」

「ふうん。そうなの。」

「でもよ、メットつけてりゃ判りゃしないんじゃないか？」

「第一あたくしたちがクォドラクで来ているのだということも未だ向う側には知られていないはずですし。」

「…甘いな会田。それくらいの情報網なら相手だって持ってる。」

　好はさっさと地図を畳みはじめた。

「それで？」

　飄々として、ひろと先輩。

（参照したければ資料）

http://85358.diarynote.jp/201612212328194175/

（案の定、日本は再軍国化の一途をたどっちまったと見える。）　（『俺と好』　ぼつげん救済こおなあ。）

2016年12月21日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

（没原稿・第四部）

「惑星間自由貿易人ヤニ・シュゼンジシブ・シュゼンジシカ。火喰い竜のヤニと云えばもしかして御存知じゃないかと思うンですけどネ。」

　ピーッと低いハッチのブザーが鳴るのへヤニさんはスタスタと出て行った。

「　ハイな。」

　エアロックの開閉スイッチを押しながら目一杯なまめかしく壁にヒジついてシナ作って。

「　お役目ごくろうさんでございます。」

　残念ながら俺の方からは見えない、凄いほどにあでやかだろう微笑みに、踏み入って来ようとした若いパトロールはまずビビらされてしまったようだった。

　その鼻先に小さな銀板とカードをさしつける。

「　惑星間自由貿易人ヤニ・シュゼンジシブ・シュゼンジシカ。

　"火喰い竜の" ヤニと云えばもしかして御存知じゃないかと思うンですけどネ。」

「… "火喰い竜" …！」

　新入りらしきパトロールの目にチラッと尊敬と憧れの色。

　…へえーヤニさん有名人っ！

　しっかし自由貿易人なんつってライセンス（許可証）や身分証明書出して見せたところで、早い話は宇宙の運び屋、アウトロウ（無法者）に、パトロールが憧れていいもんか…　いまいち疑問。

「御覧の通りこの船の今回の荷は生身の人間でしてね。ま、乗ってらっしゃるのはこのお２人と…あと１人２人、大人の男もおりますがね。そこンとこは察して下さいよ、ハンサムなお兄ィさん。

　首に大金ぶら下げてる連中なもんで、パトロールの前に出させるわけにゃいかないんですヨ。」

声はにこやかで下手に出ながらも、ヤニさん断固とした態度で前に進み出て、ごく自然な形でパトロール、船外に押し返す。

続けて自分も揺れるタグボートの上にあざやかに飛び降りて…

スリット入りのロングドレスったってスペース・スーツの１種なんだから、もちろん下に細身のパンタロンみたいなものをはいてはいる。

but, それが薄い白色の半透明に肌の色や脚の形の浮いて見える材質でできてると、

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612221921144744/
「　惑星間自由貿易人ヤニ・シュゼンジシブ・シュゼンジシカ。火喰い竜のヤニと云えばもしかして御存知じゃないかと思うンですけどネ。」　（『俺と好』　ぼつげん救済こおなあ）
2016年12月22日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

（１）　（Ｐ．３５０～ｐ．３５５。）

「地獄に墜ちんのが恐くてな。」

　ニタってな凄みのある笑い。

「　ンな冗談やってっぱーいかよっ！」

　レーダーの白点輝点はずんずん進んで来る。

　最寄りの陸上基地からも迎撃・捕獲の為の援護機群がハデに飛びたちつつあるようだった。

「おーおーたかが１隻にごーてーねなこって。」

　ひろと先輩まるでアセってる気配がない‼

「お、空中戦やろーぜー空中戦。この船なんか武器積んでねえのっ」

「　…そりゃありますがね…」

「相手何機いんと思ってんだよッ★」

「とにかく。」

　ヤニさんがさっさとコクピットから戦線離脱ってしまった。

「あたしゃこの辺りは不案内デシテネ。そりゃ何処へ行きゃ無法者（おなかま）に会えるかくらいの情報は持ってますが…　これったけの皇国正規軍ひっつれてそこへ乗り込むような非常識な恥ずかしい真似ァ、したかありませんやね。」

　…そ、そんな。

　万事休しちゃうじゃないかッ！

「　現在位置は？」

　ガレージに通じるドアの所から響いた声は、しかしもちろん好である筈がなかった。

「　おじいさんっ！　起きてきちゃダメよ、傷口がまた開いちゃうっ!!」

　ユミちゃんが慌てて叫んだ。

「　現在位置…　座標を訊いている。……聞こえんのか？」

　好が、素速くシートに納まってパネルに手を伸ばしながら、幾つかの数字を答える。

「　よし。…進路そのまま。高度下げ。海面５ｍ。」

　ヤニさんが素速くとって返してメインシートに着いた。

「…高度下げ。海面まで５ｍ。」

　凛とした復唱の声も物慣れている。

　急速降下でガクンとＧが変わり、近づいた波頭とジェットの乱気流の為に船体にひどい揺れが加わり始めた。

「　この船にカモフラージュ機構は？」

「ございますヨ。」

「　ふむ。…用意してくれ。青を。…いや、スイッチはまだだ。」

　下手をすれば舌を噛めそうな震動のなか、俺がじーさん支えている間にゆかり姫が居間にある１番大型で丈夫な椅子をコクピットの２つのシートの中間後方に運び込んだ。

　バヌマさん坐らせ。

　ユミちゃんが包帯の具合確認する暇に栗原が応急の工具持って来て椅子を固定する。

「　竹中。代われ。」

　手動に切り換えてどんどん複雑怪奇になっていく計器盤の読み取りに、好があっさり先輩へ籍

をあけ渡した。

　そりゃ、もちろんこのまま好が続けていたって素人にしちゃ人並み以上にできるんは良く解ってる…

　それでもひろと先輩ときたら初めての機械だろうと１０分あれば１０年来のベテランみたく使いこなしちまう１種の鬼才だし、好にしてみれば喧嘩する時にはその場で望み得る最高の布陣にしとくのが、まあ、主義といいませうか、本能になっちまってる。

　しばらくバヌマ老人、好、ひろと先輩、ヤニさんの間で数字と専門用語まじりの質疑応答が繰り返された後、『北北東２０』へ向けて進路修整が行なわれた。

　どうやらこの場での指揮・決定権はあっさりバヌマ老人に委譲されたらしい。

　レーダー・レンジから俺たちのもとの進路を追尾し続けているらしいパトカー群の影がちょっとの間はずれてしまっていたが、やがて散開して有視界航法で我々を発見しようというのか（海面上５ｍというのは波頭にかくれるので普通のレーダーでは確認できない）、各機がぐんと絶対高度をひき上げるのが計器盤に現われた。

　右舷の船外モニター・スクリーンに大きな島影が見えはじえ、やがて近づき、消える。

　MISS-SHOT 号は昨夜 入りはな で停泊した浅くて広大な湾岸部に沿って、いよいよ深く進入しようとしているところだった。

　海岸線は低く、妙に赤っ茶けて植物の色が少ない。

　距離のせいか人造の構築物もほとんど見わけられないようだ。

　海流の変化か水底の深さに差ができたのか唐突に海の色の切り換わるラインが見えた。

　岸までは３～４km。

　遠浅。

　バヌマさんがその線（ライン）に乗せて船を東新させるように指令を出した。

　カモフラージュ機構、発動。

　こいつは液晶かなんかの仕掛けで船の塗装（ペイント）の色が自由に変えられるってやつらしい。

　軸線に沿って左右をツートンカラーに染めわけて、みごとにカレイかカメレオン。

　これでまた高空から視認される虞れも大分減らせた。

　波が進行方向直角にかぶさって来るようになったので横揺れが本当にひどい。

「大丈夫？　おじいさん。」

　ユミちゃんが医療キット丸ごとクォクから外して、苦労して居間まで持ち込んで来ていた。

　あれこれ薬ビンを探す。

「栗原クン。お湯、沸かして注射器煮たてて来てよ。」

「煮沸消毒って云やおれにも解るんだけどなー。　くそー空中戦ッ」

「これはどうやら長期戦にならざるをえないようですわね。」

　ブツクサ呟きながら鍋探しだす栗原の隣りで姫はお茶の仕度を始める。

　うわーん俺だけまたやる事が無いよっ☆

　どーしようもないので再びコクピットに向きなおる。

　好、いつの間にかヤニさんの後ろに立って腕組んで。

　ひろと先輩はコンソールっから頭上げない。

「……っ　ユミちゃあんっっ　止血するつもりなら急いだ方がいいっ！」

　バヌマ老人は表情びくりとも変えないのに血の気のまるでない顔をして、下腹部の真っ白い包帯には、また、赤。

「…そんなこと云ったって清クンッ☆」

…大揺れの中で、どの作業も難航していた…。

（参照したければ資料）

http://85358.diarynote.jp/201612222125247535

（Ｐ．３５０～）　（１）　of（『俺と好』　一挙４０枚！分の、ぼつげん救済こおなあ）…。

2016年12月22日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

前方に島が現われる。

いや…島じゃないな。

本土から直角につきだしている。

昨夜あとにしたやつ程ではないが、それでも "岬" と呼ぶにはちょいと大規模な半島だった。

いっそ見事に上部の高さがそろっている。ぺったんこの平面。

海食台…だろうと乏しい地形学の知識で あたり をつける。

ひろと先輩が障害物に関する数値を手速く読み上げた。

「進路は？」

ヤニさんが尋く。

バヌマ氏答えない。

両眼をつぶって何か考えごと。

その時、開けっぱなしの通信回路が

｛　目標発見‼　｝

を傍受してよこした。

「　！　…あちゃーっ…　」

ひろと先輩の肩越しにのぞくとレーダー１面の輝点が急速に中央に集まって来ようとしている。

「　ぅわあぃどーする気だよっ！？」

　それでもバヌマさんは黙りこんだまま、姫はせっかくの無重力空間用チューブパック・カップに入れたてのお茶をあやうく取り落とすところだった。

「…針式のでなくって良かったわ。」

　ユミちゃんが我関せず、て感じで注射器具を怪我人に押しあてる。

「　お、やっぱ空中戦っ！　」

「俺は死にたくないッ★」

「だってやるっかないじゃん？」

「　…高度３００。ウラ半島を飛び越える。」

　老人は静かすぎるほど落ち着いていた。

「　了解（ラジャー）。」

　ヤニさんの指が操作卓（コンソール）の上。

「　１０．２５、４５、…１５０、…２８０…　ストップ！」

　Ｇの変動。海面がぐっと遠去かるにつれて嘘のように揺れがおさまった。

　安定したジェット音。

　すぐ眼下に切り立った崖。

　赤茶けた埃だらけの幅の狭い大地だった。

　堆（うずたか）い、のっぺらぼうの台地のそこかしこに汚れた灰色の四角形のものが埋まっている。

　半島の先端３分の１くらいを、恐ろしい程に真っ暗く深い亀裂が横切っていた。

俺はハッと気づいて船外後方をモニターしているスクリーンに目をやった。

１面の赤茶色の彼方、山脈の… 残骸 。

あるべき筈の円錐形が、見えない。

「　…磯原さん…　確か、Ｔ市に越していらっしゃる前は、この辺りに…？」

「　うん…　オフクロが、景色見るの好きでさ。わざわざ西向きの高台に家建てやがんの。」

住んでいたのはもうちょい北だったけれど。

この半島、海あり山ありで日帰りで遊びに来るにはもってこいの場所で。

「　きゃーあっ！　なァンなのォこーの海はっ！？」

ユミちゃんの悲鳴ともつかない声にアセって前に向きなおると、うって変わって、緑。

「　……　海ィ！？ッ」

栗原が吐き気のしそうな声でうなった。

｛　目標捕捉っ！　｝

あいもかわらずつけっ放しのスピーカーから唐突な大音量。

約１５秒間あいだを置いて、至近距離でのミサイル爆発!!

「ぉお～や、おいでなすった！」

ヤニさんが いとも優雅に MISS-SHOT の高度を下げた。

「ギャオ★」

ひろと先輩がアゴ打ちつけて喚く。

「　…　海　……ね。」

　カワイクなく素速く腕を伸ばして体を支えながら、好がうっそり唇のはしを吊り上げた。

　…スターエア＝シゾカ市（シティ）航路から脱けて今 "ウラ半島" 飛び越えて。

　ふんここはどっせＴＯＫＩＯ湾とでもゆーんだろーよ。

　…あたり１面の緑。

　うす気味の悪い、何かを思い起こさせる色調。

　ところどころに、泡。

　湧きたつ。海の ぬめり 。

　廃油ボール。

　そしてその全てを覆いつくす、しろく、汚らわしい、瘴気…

「　…　そりゃ、俺たちの時代 にだって、とても キレイ と呼べるシロモノじゃあなかったけど、この海は。」

　だけどそれでも 青かった ンだぜ。

　俺は、たぶん泣きそうな顔をしていた。

「…　竹中。気密チェック。」

「あい…　」

　よ。とまで云わせず、その時まで誰からもコロリ忘れ去られていた赤ン坊がもの凄まじい声で泣き喚きはじめた。

「…ぃいっっけなぁい！　ミルクもオシメも未だだったんだわ！」

　ユミちゃんがすっ飛んで行く。

「あたくしも、」

「船体気密ロック万事よろし。船外アナライザー（分析機）始動、っと。…おーすげぇ。」

　先輩がまるで平然として分析値を読みあげる。

　好もまるで動じずに。

「　おーお。まるでガミラスだな。」

　まァた訳のわからん事を云う★

「カモフラージュ機構同調完了ォ。ま、もっともこの外気成分じゃこの船の外殻も３０分ともちゃしませんがネ。あ、あぁかーいそうなあたしの仔猫ちゃんだ。

　どォするンですえ？　大将。」

　好にともバヌマさんにともつかなく尋く。

「　通信器の用意をしてくれ。」

　応えたのは、まだ バヌマさんだった。

　多少落ち着かなく赤ン坊の発する大音響を気にかけながら。

　…にしてもこの人、当人は平気そうな表情につくろってるつもりらしいけど、気をつけて見ていれば歳と、腹の傷。それに相当深い係累のあったらしい 彼女の死 のダメージ（打撃）からも、かなり傷手を受けて立ち直れていないのが明白なンだよね。

　口調はさすがに長年指揮をとりなれてる人間のそれなんだけども…

　大丈夫ですかね。

「ハイな。チャンネル（周波数）は？」

　ヤニさんがマイク手渡しながら。

「　ゼロ。５。５.。０．５６。９７。３。３。」

　暗唱するように深い声で云うのをひろと先輩の指先が適確に追って行く。

　こういう時だけ反射神経も運動能力も人に数倍してしまう。

「そのまま今のパターンを人工頭脳に覚えこませろ。正確に、コンマ８７００秒周期で１フレーズ（変化）とする。」

「　，　８７００００…　と、ＯＫ。」

「指向性を off-limit へ。３．３３秒間隔で S.O.S.シグナル（救難信号）をそれに載せて発信できるようセット。出漁最大。」

「　…　ＯＫ。」

「　敵主力の位置は？」

　また幾つかの座標が読み上げられる。どれもかなり近い。

　また、爆発。衝撃波。

　徐々に狙いは正確になって来る。

「　よし。発信。」

　コンソールパネルの１角で、定期的なＴＶ通信波の発振を示す輝線が明滅しはじめた。

｛　敵機は焦りはじめたようであります！　｝

　瘴気のためか、かなり雑音（ノイズ）のひどい通信。

「　非常用射出カプセルに同じコードをセット。」

「……オャ。この船ァ旧式でしてネ。カプセルの通信器はこっちからじゃ…」

「お。おれやって来るっ！」

　やっとやる事をめっけた栗原坊やが嬉しそうに駆けだした。

　…あ～ん俺はっ!?

「　…おしめでもミルクでもないわ。この子いままでこんなに泣いたこと…　」

　ユミちゃんのあわてたような声がする。

「　どこか具合でも…　磯原さん。」

　んな助け求められたってユミちゃんに解らんもんがなんで俺に？！

「どこか服で締めつけられてるような所はありませんかィお嬢さんがた。」

　ヤニさんが操縦桿から注意そらさずに呼びかける。

「　それが全部脱がしてみてるんだけどォ」

　女の子２人あんま情ないような声を出すんで、用もないけど俺も居間の側へ。

「　清くぅんっっ　」

「お、セット終わったぜえっ」

「　き、機嫌悪いだけかも知んないんだからサ、とりあえずあやしてみたらっ？」

　戻って来た栗原が、それまで俺の居たコクピット側の場所を乗っとってしまう。

　バヌマさんなにか複雑怪奇骨折な数式を口にして、ひろと先輩それにあわせてコース算出。ヤニさん運転手。

　好は…　あい変わらず面白くもなさそォな顔して突っ立って、何がやりたいンだか。

　ドドン。

至近距離でまた数発のミサイル。

どぶどろ の海面が跳ねて MISS-SHOT に躍り掛かる。

おわァお激震Ｍ７っ!!

ますます凄まじい赤ン坊の悲鳴。

「　きゃあっ！　」

「磯原さんっ！」

勢い余って flying-baby 。

あやうくタックルして床に転げこむ。

痛ェ〜〜〜〜ッ★

「だ〜か何でもいーから何とかしてくれッ!!」
　↑
（誰か、と云いたい。）

やけンなって喚くとピタリと赤ン坊の泣き声が治まった。

「　へ？」

怯えさしたかとアセッてみれば、安心しきってバブゥってそりゃないよっ！

「　…えらァい清クン、ベテラン保父さん！」

「こ、このコって空飛ぶの好きなンかなっ?!」

「…まるでピーター・パンですわね。」

ぴっとりしがみつかれてしまった。

居間での騒ぎもどこ吹く風とコックピットでは戦闘続行。

「お、応戦しよォぜえっ。な、やろォよォ」

「だーらこの緑霧（グリーンフォグ）の中では対敵レーダーがパープーんなんだよっ」

「　この船の大きさ（船型）は？」

「幅８ｍ、全長９．５ｍ。貨物Ｄ型タイプ自己改良型。」

「…よし。アルファーＤポイントを使おう。」

「どうする気だ？」

「　まく。」

「　とォにっかく！　バリアは張らして貰いますヨ、仔猫チャンに傷でもつけられた日にはたまッたモンじゃない★」

　ミサイルの衝撃に加えて熱線砲やらなんやらの光までスクリーンに映るようになる。

　ガラガッチャン。

　台所で固定のゆるんだナベカマが転げ落ちる音。

「　ふぃぎゃーーーー！！」

　悲鳴をあげたのは俺じゃない。カミナリ大嫌い人間の栗原デシタ。

「るせェぞっ！」

　好がなぜか俺のことを睨めつける。

　ふん。

　シュッとか音がして境のエアロックが閉まってしまった。

　後でひろと先輩と栗原から聞き出した話。

「霧とカモフラージュ機構とエトセトラ使って巧くまいた。」

ちょん。

↑
（　べっ、べつに

ぬきたくて手ェ抜いたわけじゃないっ！　）

…という、欄外カキコミが…ｗ

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612231447142057/
（２）　of（『俺と好』　一挙４０枚！分の、ぼつげん救済こおなあ）…。　（Ｐ．３５６～Ｐ．３６６．）
2016年12月23日 リステラス星圏史略　（創作）

小さなスクリーンいっぱいに飛行艇の大艦隊の飛び去りゆく姿が映っている。

MISS-SHOT 号は地に潜っている。

皇国軍の一大編隊は自軍のメンツにかけて、スターエア方面支部壊滅の犯人が恥も外聞もなくＳＯＳをわめきちらしながら逃走していくのを追っている。

もちろん、MISS-SHOT からは非常用脱出カプセルが無くなっている…

という寸法。

「　で？　」

ともあれ上手に振り切れたらしいのにたいして満足そうな様子も見せないで好。

「　それから？　」

とヤニさんまでが尋いている。

ここは火山灰土の中に半壊したまま頭をのぞかせた沢山のビル群のひとつ。

外からはまるっきりの廃墟に見えた。

MISS-SHOT は "不意に起こった砂嵐" にまかれてすぐ近くに埋もれている。

万が１にも発見されることのないよう全てのエネルギーをｏｆｆにして。メットつけてこの建物まで全員で駆けて来た。

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612231644297851/
（３）　of（『俺と好』　一挙４０枚！分の、ぼつげん救済こおなあ）…。　（Ｐ．３５７。）

2016年12月23日 リステラス星圏史略　（創作）

（　★作者よりおことわり…っっ　）

★作者よりおことわりっっ

はじめ ＳＦまがい だった筈のこの話、ついに素直なスペオペにさえなりきれませんで、も、ここっからは少し描き方かえて、純粋に登場人物の個性を（だけ）楽しんでもらうしかないと☆

１場１場でやたらめったらいろんなキャラが続出しますっっ

作者もこっからは遊びますからっっ

……あ〜〜〜〜ん‼

最初に作った構成だのテーマだの、（あったのよこれでも！）、

とうの昔に死に果ててしまいましたわっっ！　……っっ　）

０

…彼女は腰かけていた。

女性にしてはかなり行儀悪く、形のいい長い脚をデスクの上に並べて放りあげて。

一緒にいるその他数人の通信係たちはあっちこっちに連絡をつけるのでお忙しいようで。

だから俺たち１行が案内も乞わずにその部屋に踏みこんで行った時、カタっと椅子を回して持て余した脚を床につけて、威勢良くまず最初に怒鳴って下さったのが、あろうことか彼女だったのだ。…

「…こォんのアホンダラどもっっ!!　ひっとが気分良くお昼寝していりゃあ何の用なンだよ皇国軍の大編隊ひきつれて来てゴホーモン下すっちゃってっ!?」

…　…　…　ぴ。

…ん、っとにひっでェ音量＆言葉使い！

けっこ一美女なのにあんまりだァ～～～っっ★

てのが、俺の、第１印象デシタ。

「　……その、皇国軍は？」

バヌマさんが一切動じない声でまず尋く。

「失っせた失せたうせた！　いつまでもウロつかれた日にゃかなったもんじゃァないでしょーが！

……あンねー、あたしゃここのアジトの計画リード（指導）班の今日のスクラン要員なンだけどねー。

っにかくこっちの周波数と共通暗号知ってておたすけ（救援）求めて来たってのなら話ァ聞いてやるけどサ？　あんたら誰よ。代表者どれ？」

……「どれ」★

ヤニさんもねー、初回っからポンポン好きな事云って下すっちゃってたけどもねー。

この おあねーさん それ上まわっちゃって。

外見を云わせて貰うならばとにかく長い。細い。

ひょろっとして見える割にはけっこう筋肉づきもいいみたいで。

よく日に焼けて褐色に近い、だけどもとは相応に色白だっただろうって感じのきれいな色の肌。

さらされて白っぽくなった金髪。

…あ、このコは好やユミちゃんと同じ人種だなー。

４分の１くらいが日本人なんだ。

「　…ここの、ボスか？」

またバヌマ老。

「ちゃうよっ。今、総員起こしかけたからじきに来るって…

あんた、代表者？　どっかで見覚えあるよーな顔じゃん？」

「　いや。違う。」

「　んっじゃどれなのよ～ォ代表者ァ！」

じれったさそうに体、動かすのへ、すぃっと好が１歩踏み出た。

「　あンた？」

「一応な。」

「　ふぅ～んっ。わりかしいー男じゃん？」

　ところが。

　代表者が "イイ男" であろうがなかろうがそうそう上手く話ははこばないのだった。

　１見軽薄のかたまりそうな彼女、けっこう疑り深い。

　おまけに頑固★

「…そりゃーねー。敵のカタキはみな味方、だから手伝えってゆーのは解ったけどね～～～。」

　目的・正体いっさい知らせず助力しろってのは図々しいらしい…

　…あ、やっぱり…？

　好がまた例のむっつり顔で黙りこんでしまったので、ゆかり姫が居心地悪そうにモジモジし始め。

　俺と目が合う。

　うん。やっぱ何も話さずに、てのは理不尽だろうとは俺も思うよ。

　かといって説明しない好にもなにかわけか考えがあっての事なンだろうし…

「　せめって誰か信頼のおける人間に身許保証してもらうとかサァ。」

　身元保証人…　あ、アルヤさん？

　名前だしちゃ…　マズいのかなやっぱ、好の顔見てると。

　かといって俺たちこの世界に他に知り合いは…

「ヤニさんじゃ駄目なわけなの？」

　後ろでユミちゃんが小声で尋ねている。

「　いェね。反皇国軍陣営はやはり反皇勢力同士じゃありませンとネ。」

　軽い嘆息…　まてよ。

　反皇勢力…　反皇国軍陣営…

「　…ここからスターエアまで交信…　できますか…？」

　スターエア独立回復戦線副将・尾崎済。の名前を出すと彼女はなんか知らないけど実にあからさまにソバカスの浮いた鼻にシワを寄せ…そのせいでまるでビーバーを思わせるような顔になった…

　それでもくるっと振り返って自ら通信器に向かってくれたのでホッとした。

　なんか操作が相当難しいみたいだ。

｛　やあチアキ（知亜樹）。きみから呼び出し通話が貰えるなんて感激だな。通信室には他に誰もいないのかい？　ひょっとしてとうとう熱い愛の告白をしていただけるとか？　｝

　ＴＶ電話に見覚えのある優しい顔が現われ出たかと思った途端に、

　ダン**!!**

　なんて凄まじい音でチアキ殿がコンソールパネルを痛めつけた。

「　サイ・オザキっ！　あたしゃあんたに尋きたい事があるんだ神妙に答えろっっ！！」

｛　…やれやれ。何べん言ったら信じて貰えるん…　｝

「そォの話じゃないっ!!」

｛　相変わらず景気のいい音量だね。こっちじゃあチアキ女史から通話だってんでボリューム最小にしぼっといてくれたんだよ、通信係が。　｝

「おまえなっ！」

｛　ついでに気をきかせて席を外してくれた。　｝

　ちあきサンの周囲では他の通信員がもう目一杯て感じで笑いを堪えて真っ赤になってたりなんかしまして。

　…あ、そーゆー事なわけ…、ふぅんっ！

　世にも噛み合わない会話にしまいにゃ好や、ゆかり姫までが思わず失笑して慌ててハンカチ口にあて。

　栗原ひとりが最後までキョトンとした表情をしていた。

　しっかし尾崎氏って穏やか双な顔に似合わず、ひょーきんなお人やァ〜〜☆

　…ようやく真面目な話が始まって用件が通じ。

「おおぃそーいや何て名前だあんた？」

　この人も割とトロいね。アハ。

「　磯原清。こっちのバカが杉谷好一。」

「　だってサ。聞こえたか？」

｛　…ああ。その連中なら。　｝

　画面の中で尾崎さんの顔がぱっと笑って…

　…うわぁ歯が白いっ。男前っ！

｛　正体目的その他できるだけ話したくないって云っているんだろう？　僕がその点は保証するよ。大丈夫、彼らは味方だ…ぜひ協力して上げてくれないか。僕の恩返しも含めて。　｝

「　はーん何やってる奴らなのよこいつら？」

｛　スターエア皇国軍司令部の破壊。｝

　ぐわたっ**!!**

　かなり派手なリアクションでチアキさん、ひっくりこけた。

「……それを先に云っとけっつーーーーーのっ!!　」

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612231735062272/
（４）　of（『俺と好』　一挙４０枚！分の、ぼつげん救済こおなあ）…。　（Ｐ．３６８～Ｐ．３７５。）
2016年12月23日 リステラス星圏史略　（創作）

　なんか俺たち一躍ＶＩＰになっちまったみたいね。実は地球に降りて来て３日しか立っとらんちゅーのにまぁ、ま、 "反皇勢力" てのはアルバトーレとも深い仲にあるみたいだからこの先なにかと有利ではあるんだろうけど。

｛　磯原君。きみらの目的はあの場に居合わせた者以外には決して流していないから安心してくれていい。　｝

　その後チアキさんと場所交代して話した時、まず最初に尾崎さんはそう言い切ってくれた…彼一流のものっすごく人を落ち着かせてくれる笑顔で。

｛　そのせつ は本当に有難かったよ。そちらのリーダーにも御挨拶申し上げたい所なんだが、この回線は傍受されないよう１定時間以上開けない事になっているんだ。そろそろ時間切れだから。
　…それとお探しのものは多分、すくなくとも皇国軍勢力下では見つけられないようだ。　｝

「　何故、解るんです？」

｛　皇国軍勢力下ってのはつまり反皇勢力下でもあるんだ。立場上すこしでも変わった動きがあれば…　｝

　プツ。

　…俺としては済さんの笑顔がお別れも云えずに消えてしまったというのが非常に非常に残念だった…　あの真っ白い気持ちのいい歯っ!!

　…好がなンか変な目つきで俺を睨むんで思わずギクッ。

　…怒るなよ～～っおまえの許可なく勝手に済さん達に事情もらしちゃってあるのはマズかったかも知れないけどサァ。

　そのおかげで "お探しのもの" ＝アルテミス姫の…つまりは会田先輩の…に関する情報が、この辺りでは得られないってェ解ったわけじゃないか。

　皇国軍の勢力範囲ったら環太平洋一帯に広がってやんの。

　それを自力で探してまわらずに済んだんだぞっ！

　どっちかってと「お手柄」であって、おまえに睨まれるいわれは…

　もとの、みんなと居た場所に戻ろうと脇を通り抜けた時、好のバカ、手ひどく小突きながら一言、ボソッ。

「 "こっちのバカ" ってなイイ度胸だな、えぇ?!」

　…これだからＢ型人間っての俺、嫌だ…。

「　話は一応聞かせて貰った。どうぞゆっくりしてってくれと云いたい所だがこういう極悪人ならすぐとトンズラした方が安全だろうな。さて…と。

　何処へ行きたい？　輸送の問題は全て我々反皇軍陣営が請け負うぞ。」

　初めて聞く野太いわりと年くった追えが背後でして、おれがどうやらここのアジトのボスであるようだった。

「　……　おたくらの総本山。」

　好がニコリともせずにそれでも（なんとも驚いたことに!!）軽く 一礼 して、言った。

「　そいつは難問だな。」

「 手形 は持ってるぜ。」

　…で。

　部外者にはなんか良く事情が呑みこめんうちに話し合いはついたらしい。

　その日からしばらく俺たち全員、バケツリレーのバケツの水よろしく、彼らの手から手へと ”輸送" される事となっていた。

　手から手へ。アジトからアジトへ。

　MISS-SHOT は両コンテナ部とコクピットと４つのパートに分解されて一足先にトレーラーで運ばれて行った。

　取り残されたヤニさんはひどく落ちつけない様子だったけれど。

　手から手へ。

　アジトからアジトへ。

　手 にはほんの小学生達から寝たきりに近い老人までがいるのだった。

　大部分が俺たちと同じ年代から、済さんくらいまで。

　みんな若い。

　それぞれ苦しい生活をしてるみたいだった。

　メンバーの暮らしをたてるための夜行トラックに忍ばせて貰ったり、人から人への引き継ぎの待ち時間に廃墟の町のバラック長屋で貧しい食事を分けてくれたり。

　"県境移動証明書" なるパスポートを持たない俺たちは、時により２手３手に別れながら落盤だらけの古い地下道とか下水溝、子供しか通らない秘密の抜け穴…なんてものの間を静かに通り抜けさせられて行った。

「なんでこんなにして貰えるのかな。見つかったら、君らも処刑なんだろ。」

　案内人が交替する度に俺は何度かそう尋いてみた。

　ある人はただ微笑み、ある人はそんな判り切った事をわざわざなんで知りたがるんだという顔。

　小学生っぽい連中の１人はこんな風に言ってた。

「だってこれ位しかまだ出来る事ないじゃん？」

　１度、最大の注意力でもって新首都・シゾカ市を通り抜けなければならなかった際に、久しぶりに全員合流できた俺たちはかなり年老いた盲目の女性にひきあわされた。

　…大物らしい。

　そう思った。

　例えばロシア革命におけるレーニンや仏革命のルソーみたいな、陣営の一翼の思想的バックボーン。

　その人との短い会見のあと（例によって喋ったのは好とゆかり姫とひろと先輩。バヌマさんは何故だか会おうとしなかった…）、次の連絡先まで護送してくれた連中に俺はまた尋いた。

　と、くだんの老女史の孫だという人が、大体こんな意味のことを教えてくれた。

「私たちの全員があなた方のなさった事やその理由を存じ上げているわけではもちろんありません。中継して来た仲間の殆どは、むしろ何も知らずにただお力添えしているのではないでしょうか。

　私たちはとても小さな力です。皇国軍に対しようという気持ちは同じでも、アジトや仲間達１人１人によっては勝利したその後の社会がどうあるべきかという考えは１８０°違うのです。

　それでも、あまりにも強大な皇国軍団によく対抗し得るように私たちは朝日ヶ森メンバーズの救けを借りて互いに手を結びました。

　ひとつの組織として活動することができるように、皇国の勢力下全域に渡って私たちも網を張りめぐらせられるように。

　抱いている考えは１人１人が異なります。このような集団の場合、統一された思想性や共通の理想を通して仲間同士の団結をはかる事は不可能でした。

　けれど長い闘いの間に相互の親密な連絡がなければやってゆけるものではありません。

　幾度かははなはだしい分裂抗争も行われました…私の祖母がまだ若かった時分の話です。

　そんな過去を通じて、あの "朝日ヶ森" の方たちは変わらず私たちと共にあり続けていてくれます。

　彼らは行動で活路を示してくれたのです。

　まず、誰もがその人なりの理想を目指して生きているのだと理解すること。

　私たちにとって唯一の共通点は皇国軍による圧制をくつがえし、現状を改革する。その目的のみです。

　どう改革されるべきかはこの際問題ではありえず、ただ誰もがより良い理想を追うべく、それぞれなりの考えをこらしているのだ…という、その認識を受け入れることが重大なのでした。

　いずれ皇国軍が瓦解する時には私たちは争うべきなのかも知れません。

　ですが今はその時ではないし、たかが主義思想の相異ごときで仲間割れを起こしている余裕はないのです。

　それぞれがそれぞれなりに思想を追い、理想を求めているのですから。

　不必要にいがみあい、敵視しあうのではなく、相手のその理想を追おうとする心だけは自分と同じものなのだということを理解し、信じなさい…と、

　私のような者が口に出しておこがましく説教するのでなく、朝日ヶ森の方々は本当に地道な行動を通じてさりげなく主張し続けて下さいました。

　その事を私どもがどれだけ感謝してもしたりないか！

　…ですから。

　御質問とは少しズレてしまいましたわね。申し訳ありません…」

　恥ずかしそうに一旦口を切って、暗い路地裏を急ぎながら彼女はこう結論づけた。

「　ですから、今、私たち反皇勢力側に組みする者は、なかま（同盟者）からの依頼があれば四の五の言わずに協力するべき体制を採っています。

　それが奈辺のアジト、どの戦派からの依頼であれ、皇国軍の動きに反対するものでありさえすれば何であろうとも、です。

　そしてその盟約がスムーズに実行されるようになって初めて私たちは自分らの力が皇国勢力を上回るとも引けをとるものではないのだという事を知ったのです。」

　俺が彼女の話を全て理解し納得できた、とは言いがたいけれど、それでも警備兵の監視網をかいくぐりながら時折り街灯の反射光を受けて闇に浮かびあがる彼女の横顔を見ていると、ひどく力強い美しさが溢れていて…

　なんといいますか 意志 の耀き、みたいなものが瞳に宿っていて。

　それでわけもなく、

((　ああ、革命家なんだな　))

　って感じられて。

　そういうものなのかと単純に飲みこんでしまえる気になった。

「　…　ふぅんっ。」

　そしてようやく "アサヒガモリ" ラインズ、とやらの一端にたどりついたのだ。

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612231916426746/
（５）　of（『俺と好』　一挙４０枚！分の、ぼつげん救済こおなあ）…。　（Ｐ．３７５～Ｐ．３８５。）
2016年12月23日 リステラス星圏史略　（創作）

９．**Run With The Wolves.**

小さな基地だった。

人数的にはこれまで経て来た何箇所かの主要なアジトの方がはるかに大きかった…数百人規模。

だけど機能的にはせいぜい数十人しかいないこの基地の方がはるかに優れているだろうことはなんとなく判る。

なにより１人１人の表情がまるで違う。

今まで通って来た所では組織のリーダーと、そのメンバー達、て色があまりにも明白だった。

ここではそんな差はほとんどあり得ない。

全員が、他人を指導してゆくに足るだけの個性と実力と…人格…とを、兼ね備えている。

事実しょっちゅう "リーダー係" をバトンタッチしているそうだ。

ケース・バイ・ケースで銘々の適性と処理事項に合わせて。

…ちょっと信じられないほど面白い話。

「　それで "アサヒガモリ" てのはどーゆう組織ってか集団なんですか？」

俺がそう聞くと、

「　実はおれもよく知らない。」

てな答えが必ずというほど返ってくる。

「　…知らない…、って…？」

　☆　絶句。

　メンバーが所属グループ知らないでどないすんのやっ？！

　ア然としているとこんな風に云われた。

　曰く彼らも正規の…といいますかメインになるメンバー達の資格は持っていないンですと。

　単にそのメイン・メンバー達と早くから接触し、互いに信頼しあって "アサヒガモリ" を名乗ることを認めあってるってだけで…

　ふえぇっっ

　それでこんだけの人材ゾロゾロ集められんのォ！？

　…俺は十日程前に訊いたひろと先輩の話を思い出していた。

　薄暗いガレージの中、栗原と３人で…

「　おれもよくは知らん。はっきし云っておまえ（清）にゃ云うなと杉谷から口止めされてるンだがなァ。

　正行がな、まだガキ（小学生）ン頃だ。なんか判らん妙な事件に出喰わした事があってな。まあ話のディテイル（細部）が変につじつまのあわん非科学的な話だったんだが…

　とにかくそいつに巻き込まれて危うく命を取られる所だった正行を救けて、手際良くゴタを解決してくれたのが、やっぱり同い年くらいのガキで…朝日ヶ森学園てとこの生徒だったんだと。

　で、そいつの云うことには、そこと敵対するナントカいう…緑がどうしたとか云ってたな…のの活動が最近活発化して来たから、地方に住んでる友達（おなかま）で、そこの町での出来事に目を光らしといてくれられる有能な人間が必要だってらしい。

　ま、おいおいそいつが信頼できる奴を周りに集めて一緒に活動して行くとして、その町で朝日ヶ森の補助をする奴らのキー・マンになる人間だよな。

で、実力は申し分ねェしあのバカ正義感だ。当然、正行はその役に納まっちまった。

それで、その一、なんだ。

えぇとまぁ色々あって杉谷が正行の手伝いするようになってな。

おれも何だかんだでいつの間にやら抱きこまれているようないないような立場なんだが……。」

まぁつまり出先機関。外国資本の現地雇用員だと言ってしまっちゃ語弊があまりにもあまりあり…

あれ？

時代こそ違え、とにかくどうやら立場的には好はこの基地の人間と同類項、であるらしかった。

どーりですっかり溶けこんじまって、めったに俺たちの所へも戻って来はしない筈だよ、フン。

そうなんだ。

旅の疲れを落とすって訳でもないらしいのに俺たち１行、ここ２～３日なぜかこの基地に足どめ処分を喰らってた。

理由なんて例によって好が説明するワケもない。

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612232025138511
（６）　of（『俺と好』　一挙４０枚！分の、ぼつげん救済こおなあ）…。　（Ｐ．３８６～Ｐ．３８９。）
2016年12月23日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

「この船にカモフラージュ装置は？」

「ございますョ。」

「用意してくれ。青を…いやスイッチはまだだ。」

　ゆかり姫が居間にある１番大型で丈夫な椅子をコクピットの２つのシートの中間後方に運び込んだ。

　バヌマさん座らせ。

　ユミちゃんが包帯の具合確認してる間に栗原が応急の工具持って来て椅子を固定する。

「　竹中。代われ。」

　手動に切り換えどんどん複雑怪奇になっていく計器盤の読み取りに、好があっさり先輩に席を明け渡した。

　そりゃ、もちろんこのまま好が続けたって素人にしちゃ人並み以上にできるのは良く解ってる…それでも、ひろと先輩と来たら初めての機械だろうと１０分あれば１０年来のベテランみたく使いこなしちまう１種の鬼才だし、好にしてみれば喧嘩する時にはその場で望み得る最高の布陣にしとくのが、まぁ、主義といおうか、本能になっちまってる。

「通信器の用意をしてくれ。」

　バヌマ老人が、歳と、腹の傷。それに相当深い係累があったらしい彼女の死のダメージ（打撃）がある筈だとはとても思えない様子で厳しく命令した。

「　はいよ。周波数（チャンネル）は？」

「　ゼロ。５．５．０．５６．９７．３．３．」

　暗唱するように深い声で云うのを先輩の指先が適確に追って行く。

　こういう時だけ、反射神経も運動能力も人に数倍してしまう。

「　指向性を off-limit へ。そのまま今のパターンを人工頭脳に覚え込ませろ。３．３３秒間隔でＳＯＳ（救難信号）をそれに載せて発信。出力最大。」

「……ＯＫ。」

　コンソールパネルの１角で、定期的なＴＶ通信波の発信を示す輝線が明滅しはじめた。

「回路固定。非常用音声通信器スタンバイ。」

　今や間違いようもなく、少し嗄（しわが）れる老人の声は、かつては１団を率いる長だったのだろう事実を証明していた。

　海面すれすれを飛行する MISS-SHOT は陸に近づくにつれますますその揺れをひどくする。

　その動きの中で、

「　巧い手だ。」

　悠然と腕を組んでコクピットと今の境につっ立ったまま、何を考えたのかそう呟いて、好は口の片はしを笑いっぽく吊り上げ、余裕たっぷりに目を光らせていた。

　バヌマさんの指揮ぶりを傍観。

「　アンテナを垂直上方に向けろ。」

　非常用の一般周波帯域から殆ど受信能力外に近いゾーンまで数波おとして、切り換えスイッチを "受" にして、待つこと、数秒。

　唐突に何か不安定なメロディラインが流れ込んできた。

　不安定な…

　作曲された音楽というよりは、２種類の楽器がめいめい勝手な和弦（コード）を好きなようにかき鳴らし、それが偶然重なりあって…て感じの旋律だ。

拍子も変に１定していて単調だし、そりゃ時折り効果的な不協が混ざったりして和音のきれいさは確かにあるけれど、うーん何処かの民族音楽かなにかなんだろうか…。

ロックバンド組んだりしてる好にしてみれば、俺以上にこの "音" の奇妙なところは敏感に嗅ぎわけたようだった。

ひとしきり流れていたかと思うとリフレインも何もなしにまた唐突に終る。

「　マイクを。」

凝っと目を閉じて聴きいっていた老人が短かく云い、ひろと先輩、片手で取って手渡しながら "送" の側へ切り換えを押し倒した。

「…翻訳器がない。指向性を最小限に絞って送る。」

スイッチ "受" 。無言。

「こちら運び屋 "火喰い竜のヤニ" の持ち船 MISS-SHOT 号。既にそちらの探知網には引っかかっている事と思う。

援助乞う。２８号ポイント

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612221956002933/
「この船にカモフラージュ装置は？」　（『俺と好』　ぼつげん救済こおなあ）。
2016年12月22日 リステラス星圏史略　（創作）

　好でさえ水先案内人なしじゃ考えこんじまって…　あれ？　ないな。

「　おい、清。うしろ（ガレージ）行って…」

　パチリと気障に指を鳴らして人を使いっ走りにしようとしたその時。

「　現在位置は？」

　低く渋い声が響いた。

「おじいさんっ！　起きてきちゃダメよ、傷口がまた開いちゃうっっ!!」

　ユミちゃんが咄嗟に叫ぶ。

「現在位置…座標を聞いておる。…聴こえんのか？」

　すこしかすれた声の落ちつき払った調子。

　何も言わず、好が、素速くシートに納まっていくつかの数字を答えた。

「よし…　進路そのまま。高度下げ。海面上５ｍ。」

　ヤニさんもさっさととって返して操縦桿を握る。

「高度下げ。海面上５ｍ。」

　不思議と物慣れた確かな復唱の声。

　急速降下でガクンとＧが変わり、近づいた波頭とジェットのひき起こす乱気流のために、安定を失った MISS-SHOT にはひどい揺れが加わり始めた。

　バヌマさん、真っ白い包帯の上の傷口のあたりを武骨な手のひらで押さえて、それでも眉ひとつしかめるでもない傲然とした態度で、

「この船にカモフラージュ機構は？」

「ございますョ。」

「ふむ。…用意してくれ。青を…　いや、スイッチはまだだ。」

　下手をすれば舌を噛めそうな激震Ｍ７のさなか、慌てた俺がじーさん支えている（あんま必要性はなかったみたいだが）間に、ゆかり姫が居間にあった１番大型で丈夫な椅子をコクピット側にさらいこんだ。

　そのまま好とヤニさんのシートの中間やや後方へ運んでバヌマ老を座らせ。

　ユミちゃんが包帯の具合確認する暇に栗原は応急の工具もってきて椅子を床に固定。

「　竹中。代われ。」

　手動に切り換えてどんどん複雑怪奇になってゆく計器盤の読み取りに、ちょっとは不機嫌な顔をしながらも好があっさり先輩に席をあけ渡した。

　ひろと先輩、お、とか答えてのったり坐りこむ…た途端に目の色から、表情、全身ににじみでる雰囲気なンぞまでがガラッと変わっちまった。

　やだね〜〜〜〜っっ

　そりゃ、もちろんそのまま好がやってたって素人にしちゃ人並み以上にできるんだってことは良く判ってる。それでもひろと先輩ときたら初めての機械だろうと１０分あれば１０年来のベテランみたくに使いこなしちまう１種のばけもの（鬼才）だし、好にしてみれば喧嘩する時にはその場で望み得る最高の布陣にしとくのが、まあ、主義といいませうか、本能になっちまってる。

「それで？」

　と誰ともなしが言い、しばらくバヌマ浪人、好、ひろと先輩、ヤニさん、の間で数字と専門用語まじりの質疑応答が繰り返されたあと、

『 北北東２０ 』へ向けて進路修整が行われた。

どうやら この場での 指揮権・決定権はすんなりバヌマさんに委譲されたらしい。

…ふ〜んっ。

ってことは御老体、かなりの実力者だろう。って好が見込んだって事なんだ。

その、好の、かなり慣れなけりゃナニ考えてやがんだこのガキャー!!　とばかりに頭に来ちまう一見マイペースに、既にすっかり合わせちゃってるあたり、今更なこととは云えやっぱヤニさんもただのネズミ（運び屋）風情なんかじゃありませんなあ…

そうこうする間にも船体のリズム・アント方向性まるきり無視の揺れはひっきりもない。

波間を縫っての巧妙な転進後、俺たちのもとの進路を追い続けたらしいパトカー群の機影はほんの束の間、レーダー・レンジから外れて下さっていた。

が、やがて向うでもこちらを見失っちまった事にあいにくながらお気づきにおなりになられちゃったようで、やがて散開して有視界航法で我々を発見しようというのか、（海面上５ｍというのは波頭にかくれるので普通のレーダーでは役に立たない…常識だね。）

各機がぐんと絶対高度ををひき下げるのが計器盤にあらわれた。

場所は海。

太平洋上の見渡す限り「これも海か！」…の世界なんだなこれが。

対する我らの MISS-SHOT ちゃんは世にもセクシーなまっかっか☆ ときてる。

折しも夜明け。

これから色彩が明確になろうという時刻。

…余談ながら時計をのぞくと、なんとまだ朝の５時前（ぎゃ!!）だった。

俺、どっと眠気。

コクピットの４方の壁面をとりかこむスクリーン・パネルには、暗色の、蒼というよりも殆ど黒か鉛灰色に近い、うねうねとどよめく平原が広がっている。

向かって左手、少し前方よりに、ひどく幻想的なあかつき（暁）色。

光の世界。

しばらく行くうちに、夜のあいだ一旦遠去かっていた陸地…あぁあ母なる不動の大地っ！…（俺もう船酔い起こすよ…）が、海よりも空よりもなおいっそう黒々と横たわって見えはじめた。

…ホント、なんだってこのあたりの陸にはあかり（灯）ひとつ無いってんだろう？

あんまりに、無気味で寂しすぎるじゃないか…

…ふわァ。ねむ。

睡魔とサンハンキカンの混乱が軽い、不安な幻覚症状を持ってきた。

まっ暗な、人の死に絶えた大地。

その本土の風景をさえぎるようにして右舷の船外モニターに島影が現われる。

結構近い。

やがて近づき、消える。

MISS-SHOT 号はゆうべ 入りはな で停泊した浅くて広大な湾岸部に沿って、いよいよ深く斜めに突っ切るような方向で侵入しようとしているところだった。

海岸線は低く、朝の明け初めたばかりの光のなかで妙に赤っ茶けて植物の色が少ない。

人造の建築物もきっと距離のせいだろうとは思うけれどほとんど見分けられないみたい。

海流の変化か水底の深さに段差でもできてるのか陸に沿って唐突に海の色の切り換わるラインが見えた。

揺動のなか船はずんずん進んで岸までは約３～４km。

遠浅らしい湾。

バヌマさんがその濃藍と青の境線にのせて船を東進させるよう、短く指令を出す。

カモフラージュ機構とやら、発動。

カモフラージュなんてのよりはカメレオンと呼ぶべきだった。後から聞いたはなし（説明）では。

こいつは液晶かなんかの仕掛けで船のペイント《塗装）の色が自由に変えられるってやつらしい。

軸線に沿って左右をツートンカラーに染めわけて、みごとにカレイかヒラメかそれともＥ.Ｒ.バロウズの世界。

ヤニさん御自慢の MISS-SHOT の場合、更にその気になると外装が裏返しになったりなんかして、民間機にはキツク御法度の、例の、アンチ・レーダー塗料で身を包んだりも出来る、んだそうだけど…

ま、今回は波頭がその任を果たしてくれてるからね…かなり、平衡感覚きたえられるけど★

カモフラージュ機構（システム）を働かせるってのはえらく金がかかるんだそうだ。おかげでいつ上空から発見されるのか心配する必要はなくなった。

……　……　……　しかしっっ‼

べつにこう書いたからって見つかったわけじゃないよ。

だけどねェ。

思わず波陣が進行方向直角にかぶさって来るようになっちゃったんだな。

ジェット噴流の巻き起こす熱風と、海岸線近くに達した太平洋波の崩れおちる勢いが相乗して、も、船の震動具合のひどいの、ひどくないのって……

はっきり云ってドールの神を八ツ裂きにして焼き肉鍋に叩ッこんで七味ぶっかけて呑み下してやりたくなるほどにひどいッ！★

　これをユミちゃんに言わせると、

「…笹ブネを、洗濯機なんかじゃなく 脱水機 の方に放りこんで、最大速度に目盛り合わせて掻き回してる所へ更に掃除機の首つっこんで吸い取ろうとしたらこうなるんじゃ」ないかという揺れ方。だったそーで。

（ついでに云うと彼女かんそおきは使わない主義です。）

　とにっかくローリング（横揺れ）がメチャクチャにひどかった。

　それも規則的に来るやつならまだ幾らでも慣れようもあろうってもんだけど、不定期便。

　それへシャックリみたいな勢いで唐突にピッチングやホッピングが入る。

　俺は思わず恐怖の物理テストを考えてしまいましたねっ！

　曰くナントカ波とカントカ波が干渉しあうとどーこーっていう…

　それって言うのも全てみんな、しつこく飛びまわっている皇国軍のボケどもが、悪いんだぞっっ‼

　くそーーーーーー！！

「　大丈夫？　おじいさんっ」

　１人でヤヌスの呪いを敵さんに叩きつけている暇に、良い子のユミちゃんは１人で医療キット丸ごとクォクから外して、苦労して居間にまで持ち込んで来ていた。

　……う。

「栗原せんぱい。お湯、沸かして注射器煮たてて来てよ。」

「…煮沸消毒って云やおれにも解るんだけどなー。…くそー空中戦っ」

「これはどうやら長期戦にならざるを得ないようですわね。」

　ブツクサ呟きながら鍋探し出す栗原の隣で姫は朝食の仕度を始める。

　うっうっ俺だけ力一杯またも海のもくずをやってますよっ　どーせっ

　どうしようもないので再びコクピットに向きなおる。コケてこれ以上バカにならぬよう、しっかりエアロックさん抱きしめて。

　好がいつの間にか俺のすぐ側に立って憮然として前を睨んでた。

　うわー三白眼。

　もちろんこの凄まっじいアースクウェイクの中でも、つかまらなきゃ立ってられぬなぞとブザマな話は好にはなし。

　凝っと腕組んで悠々バランス。

　…いや〜カッコいいなァと思わず見とれてみたりして。

　ホントに、こいつ、性格以外は すべて良くできた奴だ…。

　ひろと先輩は、も、コンソールから顔あげない。

　ヤニさんはひっきりなしの波と、ニギヤカに悪態つきながら格闘している。

「　！　…ユミちゃあんっっ！　止血するつもりなら急いだ方がいいっ！」

　バヌマ老人は表情びくりとも変えてないのに血の気のまるで無い顔をして、下腹部の真っ白い包帯には、また、赤。

　震動に耐えようとして力、入れちゃうのが良くなかったんだ…

「　そんなこと云ったって清クンっ！★」

　大揺れの中でどの作業も難航していた。

「…あと少しだ。あそこを越えてしまえば…」

　傷を負っている老人が誰にともなく呟く言葉にはひたすら迫力がある。

　前方に島が現われていた。…いや、島じゃないな、本土から直角に突き出している。

　昨夜あとにしたやつ程じゃないけど、それでも "岬" というにはちょいと大規模な、半島だった。

　いっそ見事に上部の高さがそろっている。

　ぺったんこの平面。

　海食台…だろうと乏しい地形学の知識であたりをつける。

　ひろと先輩が障害物に関する数値を手速く読み上げた。

「　進路は？　」

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612282036415205/
（Ｐ．３５２～Ｐ．３６３。）
2016年12月28日 リステラス星圏史略　（創作）

好でさえ水先案内人なしじゃ考えこんじまって……あれ？　ないな。

「　いい考えだ…」

とかニタリ笑っちゃって、ば、馬鹿っっ‼

１８０°回頭しちゃって、どうしよーってェんだよっ！

皇国軍をオデムカエいたしましちゃうつもりかよ～～～っっ？？

「どうせ他人の船だ。このさい華々しく散ってやろうじゃないか。」

「杉谷さんっ!?」

マジな顔して冗談すなって云うの。あ”～～～★

ヤニさんが、とり澄ました猫がいきなり足元をさらわれたような表情を、した。

好のアホはさらに急加速なんて真似をしてみたりして…

「　お、ラム戦やれるっ！　ラム戦っ！」

えぇいっ。栗原お子様ランチ坊やはまたも気楽に判らない会話をっっ‼

……　……　……

「……若旦那がた……」

…ぅあっ。いいっ！

ヤニさんのその微妙な顔、思わず可愛かったりなんかしたりしてっ！

…不気味に好が二カッと嗤った。

「……そこどいて貰えませんかね青二才。

　メインシートはあたしの席なんですよ。」

　…あ～もう絶世の美女に脅迫かけるなんざこ奴らに良識ってもんはないのかっ

　これはおあとが恐ろしいだろなー、と俺が１人で冷や汗タラタラ、好はニタニタ、ヤニさんと席、交代して。

　…と、見るや、つねひごろ普段はいつでも運動神経なんて奈辺にあるんですかっ、というひろと先輩が、とても絶対に信じられないエンタープライズの「ワープ７」的超速度で動いて…

　好が改めて座ろうとしていたコ・パイ・シートを乗っ取ってしまった。

　ひええぃっ！

　背中向きで顔が見られなかったのが残念。

　ヤニさんがあからさまにザマーミロ♪ てェな声で、

「１８０°転進。とりあえず地下都市に向かいますョ。」

　と、言った。

　追いつ追われつコーコクグンさんと MISS-SHOT 号のエンジンさんとは実力伯仲、おぉ宿命のライバル！の世界。

　で、せめて敵のレーダーから姿くらまして時間かせぐために海面上５ｍまで小度を下げたんだけども……

　揺れるんだよね、これが。

「　おじーさんっ！　起きてきちゃだめよ、こんな時にっ！」

　また傷口が開いちゃうとユミちゃんが悲鳴をあげた。

　御老体＝バヌマさん、あいつぐ回頭や舌を噛めちゃいそうな激震に異常を感じ取って、出て来てしまったらしい。重傷をおして。

　ゆかり姫が例の調子で寝ていて下さいと説得するんだけど頑として動かない。

　それもしんねりむっつりおし黙ったまンまで。

　…暗いね〜…

　仕方がないので居間にあるうち１番大きくて丈夫なイスにとりあえず座って貰って、右左に船体がかしぐなかで俺、その椅子を支え。

　ユミちゃんが包帯の具合を調べ直す暇に栗原が応急工具持って来て床にイスを固定さしてくれた。

　降下後、ヤニさん勝手に転針。

　機嫌が相当悪そうなのであえて何処へ行くのかとは誰も尋ねない。

　レーダー・レンジからちょっとの間、俺たちのもとの進路を追尾し続けていたらしいパトカー集団の影が外れて下さっていた。

　が、やがて散開して有視界航法で我々を発見しようというのか、（海面上５ｍというのは波頭が邪魔になって普通のレーダーでは役に立たない…常識だね。）

　各機がぐんと絶対高度を引き上げるのが計器盤上に表われた。

　場所は海。

　太平洋上の見渡すかぎり「これも海か！」…の世界なんだなこれが。

（参照したければ資料）
http://85358.diarynote.jp/201612291801184947/
（Ｐ．３５２．～Ｐ．３５５。）　（Ver. Ｂ）
2016年12月29日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (1)

ちなみに。…言っちゃっても、いい death かぁ～？？

⇒画像の「赤丸」の位置と大きさ、

「そのまんまグリーンフォグ（緑霧）湾」。

…なんですけどォ～…？？？

（つまりあいつらはそれと知らずに？相模湾をナナメに横断して三浦半島をひとまたぎに跳び越え、右側に何も見えない＝千葉県全域ほぼ水没後の＝東京湾を北上し…つつ、バトるってる…最中★）

の騒ぎもどこ吹く風とコックピットでは戦闘続行。

　好はあい変わらず面白くもなさそォな顔して突っ立って、何がやりたいんだか。

　栗原がさっきまで俺の居た場所を乗っ取っちまってる。

　何やら複雑怪奇骨折なデータにあわせてひろと先輩コース算出。

　ヤニさん運転手。

「お、応戦しようぜぇっ。な、やろォよォ」

「だーらこのグリーンフォグ（緑霧）の中じゃ対敵レーダーがパープーんなんだよっ」

「舌噛みますよ若旦那がた！」

　敵さんはもう大分近づいて来てるらしい

　ミサイルの衝撃に加えて熱線砲やらなんやらの光までがスクリーンに映るようになる。

　ガラガッチャン。

　台所で固定のゆるんだナベカマが転げ落ちる音。

「　…ふぃぎゃーーーー！！」

　悲鳴をあげたのは俺じゃない。カミナリ大嫌い人間の栗原。

「るせぇぞっ！」

　好がなぜか俺のことを睨めつける。

　ふん。

　シュッとか音がして境のエアロックが閉まってしまった。

　こっち側に俺と栗原。女の子が２人。バヌマさんと、俺の手の中の赤ん坊。

　ぐぃっ、と、信じられない程の横Ｇが唐突にかかった！

　続けて襲ってくる無茶苦茶な激震…

「きゃああっ！」

「うわっっ★」

　ユミちゃんと栗原の悲鳴聞きながらあっさりと気絶した俺をどうかだらしないとは云わんといて下さい。

　これでも赤ん坊と、バランス崩したゆかり姫まで咄嗟に受けとめるので手一杯で…

　単に自分の後頭部にまで気がまわらなかっただけじゃないかよ好っっ!!

　ユミちゃんに 実に優しく 叩き起こして貰うとそこは見知らぬ倉庫の中だった。

「…SHOT の"火喰い竜" 、ヤニ・シュゼンジシブ・シュゼンジシカかぃ。わけ（事情）を尋くまでもねェ、スターエアでの騒ぎの事ァさっそく耳にへぇってるってもんだ。

　さすが生粋の宇宙の女はやる事のケタが違うってェんで、わっしら地上の密輸屋仲間でも大した話の種よ。」

「　恐れ入ります親分さん。あたしみたいな一匹狼にゃもったいないお言葉ですサ」

「まだまだ誉めたりねェよ。…だがな。」

　船の陰でその野太い声は、だがそれでも俺たちをかくまってくれるわけにはいかねェんだと、言った。

　ここは皇国軍が法律や議会機構をも越えて全てを支配する国。

　いっかなアウトロウ（無法者）と云えども力の掟をは、無視するわけにいかない。

「ブツ（船）に関しちゃあ、わっしらもプロだ。どうとでも擬装して、誤魔化してもやろうし、後からおまえさんんお言う通りの場所にはこんで（密輸）もやれるんだが…

　人間は、なァ…」

　後から聞いた話、 "反皇勢力には力は貸さない" て暗黙の了解のもとで、ここの親分さんと皇国軍の上層部との密約は保たれているんだそう。

「船だけでも確保しといて貰えれば十分だ。オレ達は、自力で逃げる。」

　やけに重々しく好が言った。

「　……　すまねェな。」

「そんな、親分さん、どうか手を上げて下さいよ。親分さんには手下の面倒のことも御在ましょうし、本来、あたしども、門前払いを喰わされたって逆恨みもできゃしません所を、パトロールをまくのにまで助っ人を出していただきまして、本当に、…　」

「それぐれェの事しか今じゃできやしねえのよ。わっしらが、このあたりで真に "無法者" として威勢を張っていられたのも、もうずぅっとせん（昔）の話だ。

　もはや皇国軍の畜生どもに手足切られたも同じでな。……無様な話よ。」

「親分さん。」

「世間話は後だ、ヤニ。栗原、クォクを引き出せ。」

＞ユミちゃんに 実に優しく 叩き起こして貰うと
　↑
（ユミちゃんとて 好の妹 なのです。）という注釈が書き込んである…ｗ

（ちなみに「杉谷 優実（ゆみ）子」サンです…☆

（参照したければ資料）

http://85358.diarynote.jp/201612291842172799/

（Ｐ．３７２～３７５。）　（続・Ver. Ｂ）

2016年12月29日 リステラス星圏史略　（創作） コメント (2)

　逃げて逃げて…

　その、派手なペイントと外大気圏船であるという理由からあまりにも目立ちすぎる MISS-SHOT 号は、めまぐるしい移動また逃亡のさなかに地上の密輸人…ヤニさんの同業者たち…の手にゆだねられて行った。

　これまた地球では珍しすぎるクォクと共に。

　逃げて逃げて…

　だから俺たちは一般の乗り合い空中車や無断レンタ（拝借）・カーを使う以外、殆どかち（徒歩）の旅になっちまったって事なんだ、一時的に。

　船と一緒に運ばれて行ければそれこそ楽なんだろうけど、あいにくと、人は扱わない。

　ましてや「おかみにたてつくやつら」（反皇勢力）には力を貸しちゃいけない、てのがその皇国軍の暗黙のうちに闇を跳びまわる連中の不文律だそうな。

　姫は正義のためにはどうのこうのとひとしきり憤っていたけれど…

　"本土" における皇国軍の威力が予想以上にそこまで… "無法者" であるところの彼らでさえ、力の掟には従わねばならないほどの…強力なものであるならば、ヤニさんの友人たちに身の危険を冒してくれとまで頼むわけにもいかない。

　逃げて逃げて…

　んで。

　ここは花のお江戸は東京、でかつてあったところの、地下都市の内部なのだ。

　時代錯誤の話で申し訳ないが、１度でも某国鉄Ｙ線東京駅、で電車を待ち合わせた覚えのある人なら判ってくれるだろうと思う…

　あの、地下４階なぞという深層部の、昏さ。

　うっうっうっ。

　《ナルニア…》で地底世界におりて行く話を読んじまった時にも１晩眠れなかったもんだけど、怖いんですよー、本当に、 "空" のない世界、天井が重くのしかかってくる世界ってぇのは…

　…う〜〜〜。苦手だ。

　人間の住む世界じゃないっ

　皇国軍は、しつこかった。

　こちとらアルキング（walking）なんてカーチェイスにもなりゃしない。

　MISS-SHOT やクォクと別れた段階で追手もまけたようだと思いきや、あちらさんも本場だけあってスターエア（方面軍）ほどバカじゃない。

　すぐにも追跡陣を市中パトロール側に切り換えてくれちゃって、ここにあの楠木女史がいりゃあ、

「しつこいおっさんはモテないよっ！」

　くらい、云ってくれちゃいそうだ。

　どうしよう。

　どうしたら。

　…なんて、俺がない知恵しぼる必要もないんだけどね。

　ともあれ密輸商・故買人やらそのお仲間の、もっといかがわしいプロたちが巣喰うらしい裏通りの一角をくぐり抜け、しっかり軍令部の波調にあわせたラジオ小脇に相手方の動行ききながらも、好お得意の "情報集め" さえする暇のなかった未知の市街地、を、俺たちはさ迷い始めた。

　上を見ればはるか彼方に天井。

　鈍く、光る、金属。

　そこまでは町の灯りも届かない。地底の、絶対的暗黒が、不自然な人間のテリトリー（領域）を犯し、その存在を否定しようと試みているかのような、薄闇…

　そして町は気だるい午後だった。

「　割合に…　風俗が乱れている時代のようですわね。」

「そ？　俺たちの時代だってこんなもんじゃん。」

「Ｏ市は田舎だもん。」

「お、腹減らないか、杉谷」

「そーいやァ、ゆかり、サンドイッチ作ってたろ、どうした？」

「潰れましたわ、尋人さん。」

「ぐげ。」

「あすこにメシ屋あるぜー」

「…よくこの非常時に食欲湧かせられんなおまえは★」

「へらねぇの磯原?!　朝も喰ってないんだぜ?!」

「…また、胃痛？　薬あげましょうか清クン。」

「平気だけど…」

　俺は単に環境の激変とか周囲の神経のズ太さについて行けんだけなの★

「でも、本当に、２食抜きってのは体に良くないと思うわお兄ちゃん。赤ちゃんのミルクと、バヌマさんの包帯のこともあるし…」

「金は、通用するのかヤニ？」

「…一応は、ねェ。同じ通貨ですサ。カードにしなかったのは正解だし、貨幣のナンバー、いちいち記録しとくスターエア税関でもないでしょうし、」

「この状態で、全員が人の中に長時間居座る、というのは危険すぎますわね。あたくし、買ってまいります。」

　磯原さんついていらしての声に俺は赤ちゃんユミちゃんに返して、へーへー荷物持ちでごぜえますだよマダム（奥様）。

「どう思います？」

　百貨自販店みたいな所でメニューを選びながら姫が呟いた。

　へ？

「…１０日、経ちましたわ。正行さんのまの字も把めないままで…」

「　姫。」

　一瞬、つきつめて見えた表情はすぐに和んだ。

　人当たりのいい笑顔。

「ごめんなさい。これだけあれば十分だと思いますわ。予想より安く済みましたわね。」

　…少し、痩せたね…

「そっちも持つよ、姫。」

「御存知でしょ？　これでも腕力はあるほうですのよ。」

　人造土壌の敷いてある、公園の片隅で食事。

（参照したければ資料）

http://85358.diarynote.jp/201612292016239490/

（Ｐ．３７４～Ｐ．３７９。）　（続・Ver. Ｂ）

2016年12月29日 リステラス星圏史略　（創作）

「こっちだ。この道をずっと行った所に５００ｍ程で小さな点検灯がある。そいつを右にずらせ。」

「おじいさんは？」

「これを借りるぞ。」

　追って来ようとしてるんだよね、皇国軍が。

「１人じゃ無茶だよっ！　姫、この子頼む。先に行ってて」

「そんな、あたくしも…」

「抱いてちゃ撃てないよ。それよか退路、確保しといて」

　大きい方の銃はバヌマさんに取られちゃったから小型の衝撃銃。

　たださえ当らんってのにこんなヌルヌル足場で切迫した状況で…

　れ、当たった。なんでや。

　とにかく、走る。

　撃っては、走る。

　俺とバヌマさん、交互に援護射撃しあって。

「　早く!!」

　通路が湾曲しているあたりまで来ると姫が激しく呼んでいた。

　向う側に光…　どうやら反対側に出るらしい。

「バヌマさん、おっしゃってらした点検灯というのは、これですわね？　一応あちらの格子にも、壊れるように仕掛けをしておきましたわ。」

「さぁすが姫。」

「どうも。」

｛　反撃が止まったぞ、行けぇっ！　｝

　皇国軍指揮官さんがカーブの向う側で律気に騒いでいる。

　と、反対側で、小爆発。

　くだんの出口の鉄格子が音たてて崩れる。

「……行くぞ。」

　バシャバシャと浅い廃水路を踏み越えて、バヌマさんが "点検灯" に手を伸ばした。

「へー。ふーん。そーぅお。」

……かなり、馬鹿にされている気がする。

「　そーれでえ？　まさか信じると思ってんわけじゃないでしょお。」

完全に馬鹿にされている。

「　んな事いったってこれが事実なンだからしょーもないでしょーが。」

説明係は俺自身。ゆかり姫は隣で赤ちゃん抱いて少し漠とした表情で。

く、昏いぜっ！

なにはともあれバヌマさんは傷の治療を受けているんだから、そう悪い待遇とも言えなかった。

（没原稿・第五部）

（没原稿・第六部）

（没原稿・その後）

リステラス星圏史略
古資料ファイル
５－Ｘ－Ｚ
『俺と好』
（没原稿）
（本編）

http://p.booklog.jp/book/111946

【 策者 】
霧樹里守 is 土岐真扉
as
遠野真谷人

策者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/111946

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト